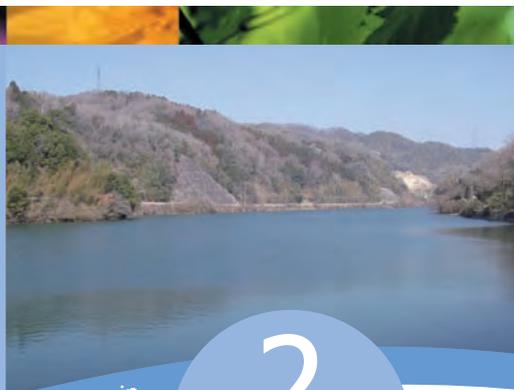


- ◆外来種問題を真剣に考えよう
- ◆開削者祭祀から見る枝下用水
- ◆「氾濫原」に栄えた村 古城遺跡
- ◆2010年度 矢作川学校ミニシンポジウム開催のご案内



外来種問題を真剣に考えよう

吉鶴 靖則

仕事柄、生きものについて授業や講演をする機会が多い。その中で、最近特に気になっているのは外来種についての認識である。

先日、生きものとの触れあいの場所（ビオトープ）を在来種の勉強の場としたいので、子どもたちに郷土の自然を教えてほしいと、ある小学校から依頼を受けた。その際、子どもたちの現状の自然観について把握したいと思い、子どもたちが欲しい在来種と理想のビオトープ像を前もって描いてもらい、授業にのぞむことにした。

その結果、欲しい在来種人気ナンバー1に輝いたのはザリガニ、ナンバー2はカメ、ナンバー3はメダカもしくは魚と続いていた。描かれたザリガニは赤色と茶色に塗られており、赤色はもちろんアメリカザリガニを示し、茶色のザリガニはアメリカザリガニの子どもを在来種と誤認識したものである。そして、カメの色はすべてミドリガメの緑色であり、つまりミシシippアカミミガメを示している。茶色の日本のイシガメを描いた子は一人もいなかったのであった。授業で魚釣りを経験した子に質問してみると、その多くはブラックバス釣りであり、当然、



ミシシippアカミミガメ(通称ミドリガメ):
要注意外来種。米国南部～メキシコ北東部原産

在来種で欲しい魚にもブラックバスが登場している。そう、子どもたちの在来種の認識も、郷土の生きものも、すでにほとんど外来種に置き換えられている状況であ

ったのだ。地域によっては水辺で在来種を探すのが困難な場所が増えていることは紛れもない事実であり、それを裏付けるように、子どもたちも日本の生きものを知らない状況になっている。

しばしば郷土愛が芽生えない、愛国心がないなどと、さまざまな方面から嘆きを耳にする。買い物も、食事も、公園も、生きものも、どこに行っても同じようなものばかりが増えた世の中である。これでは故郷と他所の区別すらおぼつかない。そんな環境で郷土愛や愛国心を育むのは難しいのではないだろうか。

島国の日本は固有種の宝庫であり、我々にとって身近な生きものでも、世界的には珍しいものが数多いお国柄である。それなのに在来種は無視されがちで、今や都市近郊の水辺は全国一律のようにアメリカ起源の外来種に多くが置き換わっている。そのような外来種問題の解決も、郷土愛や愛国心を育む一つの策となるのではないだろうか。

対策を取るべき立場の大人たちに聞いてみたい。身の回りを外来種だらけにした原因は何であろう。改善するにはどうすればよいのだろうか。早急に手を打たなければならないはずなのに、いつまでも手を打たないのはなぜだろう。在来種を知らない子どもたちが大人になったとき、郷土に求める自然はどんなものになるだろう。それで自然を、日本人の心を守れると思っているのだろうか。日本人が、日本の自然や生きものを愛することができない状況は、早々に打開したいものである。もっと危機感を持ってほしいと、切に願う次第である。

(よしつる やすのり、

自然写真家 日本自然科学写真協会会員)

開削者祭祀から見る枝下用水

達 志保

矢作川を水源とする枝下用水120年史の編集作業に取り組んで2年半になるが、現在枝下用水を作るために私財を投じた開削者・西澤真蔵に対する追弔会や慰霊祭を調べている。年間を通じて受益地の様々な場所で、その規模も主催者もまちまちに行われている開削者祭祀に出かけていくうちに、20カ所を超える祭祀が現在も続けられていることが明らかとなった。

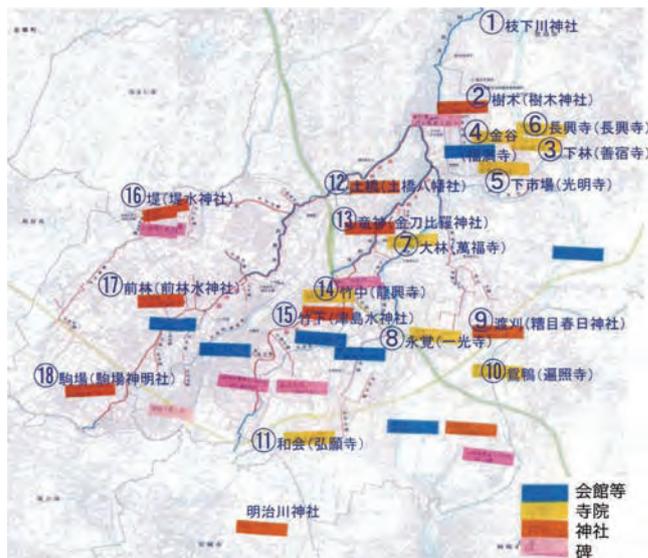
これらの祭祀には3つの型がある。1つは土地改良区による枝下用水全体の祭祀で、総括型と言える。2つ目は現在では東用水連合だけになってしまったが、地区を超えて幹線ごとに行われる主要幹線型である。3つ目は配水総代・自治区・組・農事組合など単位は様々だが、末端型といえる最小単位の祭祀であり、これが一番多い。記録をたどっていくうちに、既に祭祀が無くなってしまった地区もみつかったが、多くが現在も開削者祭祀を続けている。

なぜ120年もの時が経つというのに祭祀は続いているのだろうか。枝下用水は何が他の用水と違うのだろうか。今村奈良臣は枝下用水を「このような私的な給水事業は、日本全体の農業用水からみれば、ごく一部のものではあったかもしれない。しかし、少数であっても、伝統的な用水組合、これを継承した水利組合と異なる企業の給水事業が成立したことは、歴史の一こまとして注目してよいであろう」(今村奈良臣・佐藤俊朗・志村博康・玉城哲・永田恵十郎・旗手勲『土地改良百年史』、1977年、平凡社、60-61頁)と評している。明治23(1890)年に枝下用水の幹線が完成し、東・中・西井筋と井筋ができたのが明治

27(1894)年である。明治29(1896)年の河川法制定によって日本の河川の管理が大きく変わったことを考えると、枝下用水はその直前の私的な企業の給水事業が成立する「歴史の一こま」であった。



竹下水神社(豊田市竹元町)の祭神は西澤真蔵



現在も様々な場所で開削者祭祀が行われている。「枝下用水かんがい区域図」(豊田土地改良区)に作図

これまで日本の農業水利はいままでのムラを単位とすると考えられてきた。しかし枝下用水はムラという単位ではなく、ムラの外の力によって開削された。だからこそ枝下用水はムラの祭神ではなく水利の祭神として「西澤真蔵」を創り出し、それを末端型の組織によって維持し続ける必要があったのである。現在も複数の地で開削者祭祀を継承しているのはそのためであろう。

これまで近江商人の西澤真蔵は自身の利益のために用水開削を始めるが、農民たちと触れ合う中で改心し、最後には借金までして用水開削に命を捧げたというストーリーができあがっていた。しかしこうした時代背景を考えると、西澤真蔵の生きた時代は国も県もまだ経済力がなく法的な整備も整っておらず、西澤真蔵のような個人が自身の利益のために働くことが、そのまま国益につながっていった時代なのである。近代日本はそうした多くの人たちに支えられて急激に発展していったと考えられる。

枝下用水120年史編集の作業は現在資料集発行のために日々膨大な資料と格闘している。これからも受益地のみなさんから多くを学び、日本の農業と用水とを見る新たな視点を培っていきたいと考えている。

(つじ しほ、豊田市矢作川研究所研究員)

「氾濫原」に栄えた村 ふるしろ 古城遺跡

安田 幸市

長野県の大川入山に源を発した矢作川は三河高原の山間地を南西に流れ、勘八峡で山地を抜け拳母盆地にいたります。近世の初頭（江戸時代の始め）に築堤されるまで盆地内の流路は定まらず、雨量の多い時期にはたびたび氾濫し、上流からは花崗岩が風化した多量の土砂が流れ込んでいました。一帯は文字通り「氾濫原」でした。一方で川は上流域から腐植土等の有機物質を運び沃野を形成しています。



発掘現場*

拳母盆地縁辺には、古墳時代の八柱社古墳、市塚古墳、不動古墳などの数多くの古墳、白鳳から平安時代では寺部町内の勸学院文護寺、午寺廃寺跡などが所在し、中世には、衣城跡、寺部城跡、森城跡などの遺跡が密度濃く所在しています。これらの遺跡は後背地の段丘面上に位置しますが、人々の生活を支える稲作農業は、氾濫原の灌漑、治水によって営まれていました。

古城遺跡（御立町）は、愛知県立豊田東高校の学校用地と市道建設に伴う事前調査で平成12年7月6日～平成13年3月末日まで発掘調査が実施されました。矢作川左岸の氾濫原の沖積低地に位置し、事前の試掘調査の結果で遺構の存在が確認され、本調査が実施されました。現在豊田東高校が建っている場所です。

古城遺跡は、調査当時の地表面（耕作土）の60～90cm下から確

認され、自然堤防状の陸地に、縄文・弥生・古墳・奈良・平安・鎌倉・室町時代の遺構や遺物が発見されました。遺構・遺物は各時代に及んでいますが、調査結果から人々の活動の中心は主として古代～中世であったことがわかりました。

古代では、7～10世紀の竪穴住居11棟、掘立柱建物11棟、柵列1列、土坑29基、溝4条が確認されました。中央部の東西の水路（大溝）を挟んで、建物跡は北西部に、南部には土坑群があり、建物群は水運にたずさわる人々の居住・倉庫など、土坑群は作業場と考えられ、荷物の陸揚げ、積み出しなどを行った川港の可能性が指摘されています。

つづく中世（11～15世紀）では、13～15世紀を中心とした、掘立柱建物20棟、柵列8列、土坑130基、溝32条、井戸4基などが確認されています。古代から継続して、水路により南北に分断されますが、北部には比較的規模の大きな掘立柱建物群と柵列や井戸、方形竪穴状遺構や、方形の溝を伴う遺構および小土坑などが集中して見つかりました。南側は、古代に引き続き土坑が集中し、新たに掘立柱建物群が出現しますが規模、棟数ともに北側には及んでいません。

出土遺物には山茶碗類、土師器皿などの日常雑器に加え、瀬戸美濃・常滑産の製品や、茶道具の天目茶碗など嗜好にかかわる器種や、香炉、花瓶などの仏具、中国竜泉窯の青磁碗や北宋や明の中国銭などが出土しました。井戸内からは「急々如律令」（悪魔を早急に退散させる呪文）の墨書を有する呪符が出土したことなどは当時の精神生活の一部がうかがわ



作業現場*

れます。方形竪穴状遺構は倉庫と理解され、全体としてこれらの遺構遺物が示す古城遺跡は「川港」機能を持った、中世の都市（商業）型集落であったといえます。

水辺で船運や川港に携わった古城遺跡の人々は、矢作川と深い結びつきを持った豊かな生活があったことを裏付けています。従来、明らかにされることの少なかった郷土の中世庶民の生活の一端が見えてきたことは、大きな成果であったといえましょう。

古代～中世にかけて川港として栄えた古城遺跡の人々の暮らしはその後どうなったのでしょうか。考古史料から直接的に物語ることはできません。近世（江戸時代）には、遺構は、溝1条・性格不明な土坑3基

を残すだけで、この地に生活の基盤はなかったことを示しています。

時代は中世から近世に大きく転換する時です。流通、交易を含む社会情勢や制度の変化が大きく作用したことは間違いないと思われます。「川港」はいつしか人々の記憶から消え去り、一面は水田や畑地に変わって行きました。矢作川と人々の暮らしは、古城遺跡にみられた中世的な関係から江戸時代的な新しい関係に移っていったと理解されます。

*豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書 第23集より転載

(やすだ こういち、

豊田市遺跡調査会 会長・日本考古学協会 会員)

▶2010年度 矢作川学校ミニシンポジウム開催のご案内

矢作川学校では、中・高校生、大学生と地域の研究者との交流を図り、矢作川の自然科学や歴史文化について対話を深める場となるミニシンポジウムを開催しています。今年度も次の要領で開催します。

1. 日 時：平成23年3月5日（土曜日）
午後1:30～5:00

2. 会 場：豊田市産業文化センター
4階 視聴覚室

3. 発表の申し込み：

氏名、所属、タイトル、連絡先を事務局までお知らせください。

1 発表は約15分（質疑応答含む）程度を予定しています（締め切り2月18日）。

4. 参加費：無料

5. その他：今年度から、若人の議論が活発になるように、座長を演者の持ち回りで行っていただきます。聴講のみの参加（申込不要）もお待ちしています。



6. 問い合わせ・発表申込：

矢作川学校事務局

〒471-0025

豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F

豊田市矢作川研究所内（担当：内田・達）

電話：0565-34-6860

FAX：0565-34-6028

e-mail：uchida@yahagigawa.jp

後記

本年度の研究所シンポジウムは矢作川の外来種をテーマに実施されます。COP10の開催に伴い、全国で外来種問題が注目されるようになりました。外来種という生態系への影響ばかりが取り上げられがちですが、その背景には政治的・経済的な問題も多く含んでいるといえます。シンポジウムが一人でも多くの方にこの問題について考えてもらうきっかけとなることを願っています。（酒）